

興国寺

興国寺は日本の禅宗の歴史において重要な役割を果たし、また、醤油や金山寺味噌発祥の地としても有名です。この寺院は鎌倉幕府（1185 年～1333 年）の 3 代将軍、源実朝（1192 年～1219 年）の菩提を弔うために 1227 年に創建されました。堂内には重要な仏像や文化財が収蔵されており、境内にはスギ、カエデ、ツツジ、桜などが植えられています。

寺院の訪問

境内への入り口は南側の大門からです。そこから石畳の道が森林に覆われた敷地を通り、池や小さな石塔、その他の石碑群を通り過ぎて、二番目の門に至ります。山門は寺院本殿への入り口であり、本堂（法堂）の真向かいにあります。

本堂

本堂は興国寺の精神的な中心です。歴史ある仏陀である釈迦牟尼を祀っています。天井には本堂を守る龍の絵が描かれています。

開山者の堂

本堂の裏から瞑想ホール（禅堂）、そして開山者の堂（開山堂）へと続く回廊があります。開山者の堂は、興国寺の住職を務めた高名な禅師、心地覚心（1207 年～1298 年）の墓地を示しています。覚心は日本に禅宗を広める上で重要な役割を果たしました。彼の死後、後醍醐天皇（在位 1318 年～1339 年）から法燈円明国師（完全に目覚めた法灯の国師という意味）の号を追贈されました。

覚心の遺したもの

覚心は中国の無門慧開（1183 年～1260 年）のもとで 6 年間の修行を修め、帰国後住職に就任しました。無門は日本の禅仏教の中心となる教えをまとめた「無門関」を著しました。覚心は神聖な尺八の楽譜とともに無門の教えやその他の教えを中国から持ち帰りました。彼は瞑想の手段として尺八の演奏を導入し、虚無僧つまり「虚無の聖職者」が実践する文化的習慣を確立しました。彼らは伝統的に僧侶や托鉢修道士であり、その多くがかごをひっくり返したような形の顔と頭を覆う葦で編んだ帽子をかぶって巡礼を行い尺八を吹いていました。この独特な帽子は自我の不在を象徴し、虚無僧や人々が悟りを開けるように尺八を吹きました。

覚心は中国で学んだ発酵技術を紹介して日本で金山寺味噌を製造しました。この粗めの味噌は、野菜、米、大豆、大麦を混合して発酵させたもので、副菜やご飯のトッピングとして食べられます。金山寺味噌の紹介を通じ、覚心はさらに日本の醤油の父として認められました。味噌が発酵する過程で、発酵樽の底には汁が溜まります。覚心はその芳醇な風味の液体を味わった後、その美味しさに感

銘を受け抽出することを決意したと伝えられています。これにより醤油製造への道が開かれました。

さらに探索する

境内を散策しながら本堂（法堂）、瞑想ホール（禅堂）、開山者の堂（開山堂）の外観を見学できます。これらの堂は通常非公開ですが、正面扉のすのこ越しに本堂内部を覗くことができます。境内を巡る小道の途中に天狗の堂（天狗堂）があり、誰でも入ることができます。堂内に展示された大きな天狗面からわかるように天狗は伝統的な民話や文学に登場する鳥のような鬼です。伝説によると全能の天狗が壊滅的な火災の後に興国寺を一晚で再建したため、天狗はこの寺で崇拝されています。

寺院の起源と発展

興国寺は西方寺として創建され、当初は密教真言宗に属していました。1258 年覚心が住職に就任すると禅宗臨済宗に改宗し、興国寺として再興しました。京都の天皇から鎌倉を拠点とする武士という新たな支配階級への政治的権威の移譲を特徴とする日本史の過渡期にこの変革は起こりました。この時代は日本の仏教が急速に多様化した時代の一つです。禅は日本では比較的新しく、鎌倉幕府のもとで隆盛を極めました。覚心は興国寺を国内有数の禅寺として発展させ、全国に信仰を広める重要な役割を果たしました。13 世紀から 14 世紀の最盛期には 143 の禅寺網の頂点であり、本堂の境内だけでも 43 の脇寺がありました。